

# 中華人民共和国の鉱山を訪ねて(3)

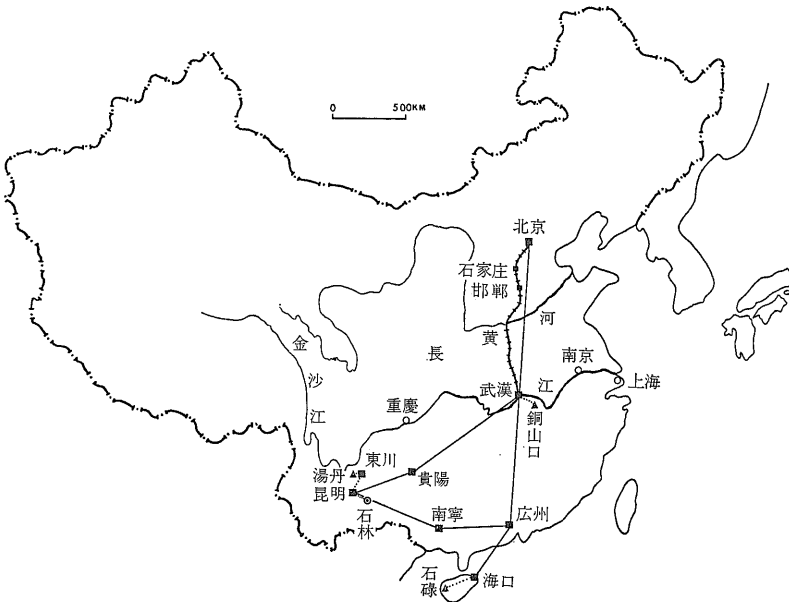
小村 幸二郎(鉱床部)  
Kohjiroh KOMURA

## 広州へ

春城の朝は爽やかに明けた。甘い大気 ひんやりとした大気 都会の一日の始まりをこれほど爽快な気持ちで迎えるのは久しぶりのような気がする。自動車の騒音もなく 心和む静かな朝である。

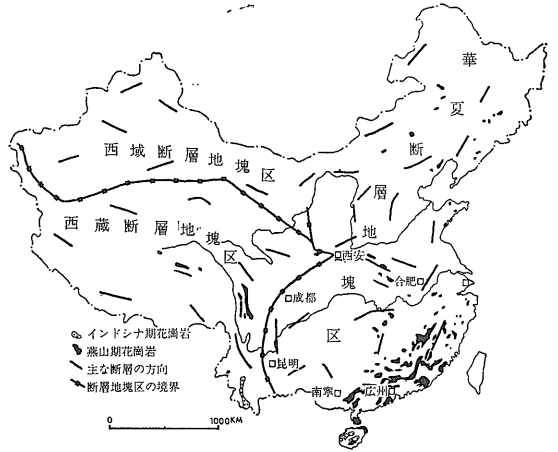
7時過ぎ まだ眠りから完全には覚めてはいない宿舎の一隅にある広い食堂だけは 既に 精力的な動きに満ちている。一足早く朝食をとっていた数人の同僚は 私達と入れ替るように 席を立てて行った。余り変り映えのしない朝食ではあるが 美しい古都での最後の朝食ということもあって 私達は ゆっくりと 箸を進めていた。幾つかの皿に盛られた料理も白粥も 完全に姿を消した。「これで終りだな」と 誰かが呟いたのが奥まった調理場に聞こえたように 大皿に山盛りの焼そばが運ばれてきた。この焼そばも またたくうちに 姿を消した。どうやら 焼そばが出るとは知らずに 同僚達は部屋へ引揚げたらしい。もっとも 朝食に焼そばが出されたのは初めてなので 無理もない。ここは名うての大陸 やはり おっとり構えていた方がよさそうである。

はるばると訪ずれた雲南の地を去るに当って 爽快な朝ではどうしても満たされない地質家ならではの心残りがある。それは 華夏断層地塊区と西藏断層地塊とを分つ構造帯を見る機会がなかったことである。北東一南西方向の断層や褶曲が発達する東側の華夏断層地塊区に対して この構造帯の西側に拮がる西藏断層地塊区には北西々々南東々々方向の断層や褶曲が発達し それらはこの構造帯の近くで 南北方向に方向を変える。昆明の西方100キロメートル付近から成都の北西部を経て西安へ向かうこの構造帯は 一体 どのような性状をもっているのだろうか。一方 燕山期の活潑な火成活動の産物である花崗岩についてみると その分布状態が大規模の断層ときわめて調和的であることに気がつく。多くのタングステン鉱床やスカルン型 或いは斑岩銅鉱床型の銅鉱床が分布する華南地域で北東一南西方向に分布する花崗岩は地質的にも鉱床学的にも そして資源的にも以前から注目されてきたが この地域の主たる断層はこれと全く同じ方向をもち 西藏断層地塊区に分布する花崗岩も 断層と調和的に 西部では北西々々南東々々方向に伸長して分布するが 東方へ向って その貫入方向は北々西一南々東方向に変わる。又 西安付近から安徽



位置交通図

省の省都である合肥付近に至る地域に分布する花崗岩は華夏断層地塊区に含まれるものの、この一般的構造方向とほぼ直交する北西々々南東々々方向の断層と全く調和的な形態と分布状態を示す。地質構造と火成活動とが相互に密接に関与する例は多く見られ、又火成活動と鉍化作用の性状・規模との間にも深い係わり合いがあることはよく知られている。後者についてみれば華南地域の福建省から広東省にわたる地域の花崗岩にタングステンやモリブデンや錫が卓越し、安徽省や江西省や湖北省に分布する花崗岩に銅が卓越するのはその例証であり、又花崗岩活動の程度からみればそれほど活潑でない黒竜江省で多宝山鉍床で代表される斑岩銅鉍床が発見されていることは、花崗岩の性質と鉍化作用の性状との係わり合いの上で興味深い。



花崗岩及び断層分布概略図

食後の一時、出発を前に見入る一葉の地図は、様々のことを語りかけ、そしてこの広大な国土の僻地への旅を誘いかける。しかし、これから先は帰国するまでその地図に見入ることはない。

美しい並木の道には、既に自転車の流れがある。食事を終えてまだ間もないはずなのに、この町の様相の変わりようはどうだろう。まるでとめどもなく押寄せる波のように、自転車の群は北を目指している。ロビーには、軽装の旅人の姿がある。恐らくこの人達の多くは、昆明湖畔の景勝地か、又は石林へ出かけるのだろう。

曇り空におもわれた昆明を去る時がきた。時折、厚い雲の裂目から洩れる和らいだ光が、一直線に並ぶ高い並木をなぶっては消えてゆく。そして時の過ぎゆくままに、その光は東になり、やがて昆明の緑をまぶしく照らしはじめた。空港へ行く自動車は少ない。恐らく旅客の多くは、既に空港へ行ったのだろう。到着した時とは変わって、空港の売店にも待合室にも相当の人だかりがある。

快晴の下に広がる風光に接することもなく、昆明を飛立つ時がきた。武昌から昆明へ来る時とは異って、今日の広州行の飛行機はジェット機である。ほぼ満席の機内は、比較的に外国人が多い故か、中々賑やかである。私達の座席は、今回も一番前の方であった。こうしたことは、偶然かもしれないが、何故か、昆明の冶金設計総院の人達や同行の現地の人達の好意の表われのように思える。同僚と私の間の座席に、遅れ気味にやって来た中国青年が落着いた。お互いに言葉が通じないこともあって、その青年は幾分気づまりなのか、広州へ着く

まで殆んど俯いたまゝであった。もっとも、余り話しかけられても煩わしいこともある。かつてバンコック経由の西廻りでテヘランへ行った折、隣席の老人に話しかけられて閉口したことがある。ヨーロッパの某国のその老人は、バンコックで乗込んで来た直後から自国の自慢話をはじめたが、その大部分は、日本では生産されていないダイヤモンドが自分の国では大量に生産されているという、自慢話であった。いくら退屈な空の旅とはいえ、2時間も3時間も同じ自慢話に相隨を打つのは決して楽ではない。年寄を労わる気持は人一倍強くと自認しているはずなのに、つい「そのダイヤモンドはどこで採掘されているのですか」と聞いてしまった。そしてその老人は、この質問の後、口を噤んでしまった。

昆明を出発して間もなく雲が切れ、陽射しが強くなった。それほど高くはないが、峻しい姿態の山を縫って光るのは南盤江の流れであろう。この水の流れは、広西壮族自治区に入って、紅水河と名を変え「死在柳州」という諺で知られる柳州を流れる柳江や、南寧を流れる郁江と合流して西江となり、やがて南海に注ぐ。「桂林山水甲天下」と讃えられる桂林の風光美に欠くことのできない桂江の流れも、梧州で西江に合流する。

離陸しておよそ50分の後、南寧到着のアナウンスがあった。南寧の地上気温は32°C、広州の気温は38°Cということである。昆明から丁度1時間、強烈な陽射しを受ける南寧に到着した。

空港の建物は余り大きくはない。広々とした待合室は清潔である。むし暑い待合室を通り抜けて、正面玄関へ出てみた。右側の壁に、故毛首席の書が飾ってあ

る。晩年の故毛首席の筆跡はやゝ右上りであるが 極端に右上りの筆跡から察すると この書は比較的若い頃に書かれたのかもしれない。待合室に建つ白い石像の顔も若々しい。

南寧は 人口はおよそ2100万人の広西壮族自治区の中心である。人口およそ50万人で 今でこそ農産物の集散地であり工業都市となつてはいるが その建設の歴史は古く およそ1600年前に 対外貿易の一つの拠点として建設されたといわれている。かつては広州と並び称される貿易都市ではあったが 立地条件の差異にもとづく発展の遅れを余儀なくされ 今は 両者の間には大きな隔りがある。邕江の畔りに位置するこの古い町は 亜熱帯気候区にあり 年間平均気温は 21°C といわれる。町の様子を見るゆとりはなく 古代からの変遷を偲び 空港ビル前に茂る亜熱帯植物の緑に今の南寧の姿を想うしかない。

南寧から広州までは真東へおよそ50分の空の旅である。南海へ注ぐ珠江のデルタ北端部に位置する大都会だけに 広州の空港は中々立派である。地上の気温は 33°C というのだが 南寧到着直前からわずか2時間ばかり過ぎただけなのに 5°C も気温が下るものだろうか。いかに国土が広く気候が異なるとはいえ この気温差は理解し難い。

広州での宿舎は東方賓館であった。既に宿泊手続は終えてあり 各人に 部屋番号と名前の入った綺麗な紙片が手渡された。空港から宿舎への道は余り広くはないが 榕樹の並木は美しい。かつては広東と呼ばれたこの都会は 日本から北京への直行便が運行される以前には 日本と中国とを往き来する人達が必ず足跡を残した所である。古都を想わせる昆明の静かなたたずまいとは全く異なり 大洋へ門戸を開く大都会だけに い

かにもエネルギーな感じがする。東方賓館は 広大な敷地を占めて 交易会場と道路を隔てて建っていた。そして 日本を離れて以来はじめてルームクーラーの恩恵を受けることになったが 不思議なことに 偶数の部屋だけにルームクーラーが取付けてあり 奇数部屋にはないらしい。

広東省の省都である広州市は人口およそ 230 万人の都会である。亜熱帯植物の美しい緑に包まれたこの都会は 古くから 商業の中心地として栄えてきた所であり又 「食在広州」の諺でも知られるように 食べ物や食することに興味を抱く人にとっては素通りできない魅力のある所である。食えることにかけては人並以上に欲深いせいか 機会があったら 広東料理の老舗として著名な伴溪飯店で食事してみたいと 密かに思っていた。そしてこの望みは 広州に到着した日の夜 現地関係者との会食がこの飯店で行われることになっていたことで早速実現した。

賑やかな向陽一路にある伴溪飯店の名は友誼飯店に変わっていた。料理はもちろん 点心(菓子やまんじゅう類)の数の多さと美味さでも有名なこの店は 想像以上に大きかった。舟の浮ぶ広大な池の囲りには この友誼飯店の家が一体何軒建っているのだろう。一度に2万人が食事できると聞いたが これは「白髮三千丈」式の誇大な話ではなさそうである。静かな水面にうつる光の柱 湖畔にゆれる楊柳の優美な姿 俗世界を遠く離れたような静寂の中に 広州の夜は次第に更けてゆく。この飯店の立派な部屋に案内された。およそ 300 年前に建築されて以来殆んど変わっていないといわれる室内は 素晴らしい調度品と落ち着いた色彩で気品があり 透かし彫りの精緻さは見事である。落ち着いた部屋に 次から次に料理が運ばれてきた。どうやら これまではあまり見なかった牛肉の料理が 幾分多いようである。和やかな食事の途中 誠に不躰とは思いながら 二三の質問をしてみた。

「食在広州という諺から 美食で太っている人を想像しますが 太っている人を見かけませんね。」

「広州は暑いのでエネルギーの発散量が多く いくら美味しいものをたくさん食べても太らないのです。」

「こゝでは牛肉料理が多いのですか。」

「中国では肉といえば豚肉のことです。豚肉が一番安く 次が鶏 牛肉が一番高いので 一般の料理には牛肉を殆んど使わないのです。また 鮑以外の貝は下層階級の人が食べるものですよ。」

一般に 服装文化に関心度の低い所では秀れた文化は発達しないものだが この最初の答えも外的要因がいわ



東方賓館  
後方の丘は秀越公園 左後方の建物は鎮海樓

ゆる広東料理で代表される広州の食生活の豊かさと深く係わりあっていることを暗示しているようで興味深い。

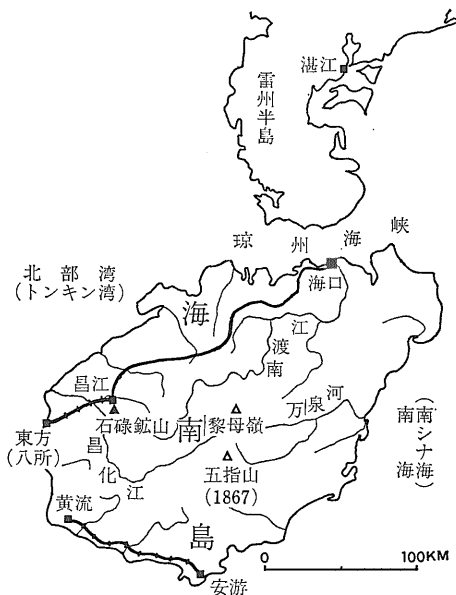
四季に恵まれた北京 寒い四川省 それぞれ特徴をもつ料理も やはり 広東料理と同じように 気候・風土と密接に係わり合って生れたものに違いない。服装に関する持論からみれば 従来地味な色で統一されていたように思えるこの国の店先に 色とりどりの生地を使った婦人服が除々に目立つようになったのは 外国の文化の吸収による従来の文化の発展への表われと思えるがどうだろうか。

慌ただしい旅の一時 広州の小高い丘の頂に建つ鎮海樓を訪れる機会を得た。静かな秀越公園の中に建つ朱塗り5層のこの建物は明時代に建設されたもので今は広州博物館になっている。最上階から深い緑越しに羊城という別名をもつ広州の家並と珠江付近が見える。近代的な建築物が多く見える広州はどっしりと落着いてはいるが 館内に展示されている原始時代から現在までの広州の変遷を示すパノラマや 阿片戦争当時の武器などを見つめると この大都市が経てきた激しい歴史の流れと人々の生きる心のすさまじさには とまどいをささえる。海外諸国との交流をいち早く手がけ 多くの海外文化をより早く吸収したこの町は その指向性と関連して 外国の汚染を早々に受けた所でもある。その代表的なものは近代中国への序幕とも云える阿片戦争である。もし 当時の清朝が 農器具を手に蜂起した農民に先がけて諸外国に対応していたならば 中国のその後の歴史は大きく変わっていたことだろう。過去を振り向かず 明日に向かって歩くと 多くの人は言う。しかし 過ぎ去った日々を想い 喜びに湧き 悲しみと生きることの切なさに耐えたことを心の糧にするのは決して無駄ではない。

### 海南島

最終目的地の海南島へ向う時がきた。トランクを宿舎に預け 最小限度の荷物を持って 軽装で空港へ向った。暑い盛りとはいえ さすがに大都会だけあって 空港の人混みは相当なものだ。例に洩れず 出発前に 昼食をとることになった。2階の食堂は満席だが 既に連絡してあったらしく 私達のテーブルには若干の料理が並んでいた。鳥賊を材料にしてあるらしい料理を除いては変り映えのしないものばかりだが 油っこくなく 割合にさっぱりとしているので全く飽きない。

待合室には藤製の椅子が並んでいる。外国人とこの



海南島の地図

国の人とは待合室が区別されているのかどうかは判らないが 私達が案内された所には 先客は殆んど居ない。通訳にうながされて待合室を出た。飛行場には大小多種多様の飛行機が翼を休めている。旅客用のバスは かなり遠くに待機している飛行機まで歩くしかない。海南島の玄関に当たる海口行の飛行機は相当に古そうである。24人乗りの機内は満席であった。外観と同様 機内もいさゝか古めかしいが しかし 機内サービスはこれまでで最高である。武昌から昆明へ 昆明から広州への機内では扇とお茶とキャンデーのサービスがあったが この海口行の機内では これらの他に アイスクリームとキーホルダーが手渡された。同じ中国民航の飛行機なのに 何故 機内サービスがこのように違うのだろうか。荒海に囲まれた島へ渡る人達への思いやりの表われなのだろうか。2700メートルの飛行高度に到達する以前に 旅客の多くは眠りについたらしい。余り涼しくもない機内ではあるが むし暑い広州よりは涼しく そして 小型機だけに少し揺れるので 眠気を誘うのだろうか。雷州半島から琼州海峡の上空にさしかかった頃 瞬間的に揺れはしたものの 広州を出発してから およそ1時間45分の平穩な飛行の後 海南島北東端に位置する海口に到着した。飛行場は広々としてはいるが 空港建家は小じんまりとしており 中国第二の島の表玄関にしては質素なたたずまいである。

この旅行へ出発する前に 海南島に滞在されたことの

あるO氏から 往時の海南島についていろいろのことを御教示戴いたことがある。 その頃 一体この大きな島の面積はどのくらいなのか 幾つかの出版物を調べてみた。 そして この島の面積についてはまだ検討される余地が多分にあるように思えた。 例えば Taschenbuch 1951—52年版では3万5600平方キロメートルと記載されているが Britanica World Atlas 1966年版では3万4000平方キロメートル 日本のT社発行の学習地図でもこれと全く同じ面積の記載がなされており 1974年発行の中華(華)人民共和国分省地図(図)集では「全島面積(積)約三万二千二百平方公里(キロメートル)」と記載されている。 およそ960万平方キロメートルを占める広大な国土面積からみればこのような差異は氣にとめるほどのものではないのかもしれないが 狭い島国で生きているせいか 何となく氣になる。 なにせ上に挙げた面積の最大値と最小値の差3400平方キロメートルは 沖縄島・佐渡島・奄美大島・淡路島を合せた面積よりも56平方キロメートルも広く 択捉島と色丹島を合せた面積よりも6平方キロメートル広いわけだから 簡単に見逃せるものではない。 仮りに 3.3平方メートルの地価を100円として計算した場合 どれくらいの金額になるだろうか。 答えは1030億3030万円である。 こういう試算をすると大変みみっちいように思えるが 自分の周辺を見渡すと もっともっと厳しく計算しなければならぬほど 世の中は固苦しく回っていることは確かであり 3400平方キロメートルの差の存在は羨やましきも思える。 いさゝか横道にそれたが 海岸線がそれほど複雑ではなく 後で述べる通り 大部分が平坦な島であってもいろいろの食違があることを知る一つの例として知っておくのも あながち無駄ではなからう。

出迎えの大型バスに乗り 西へ向って出発した。 目



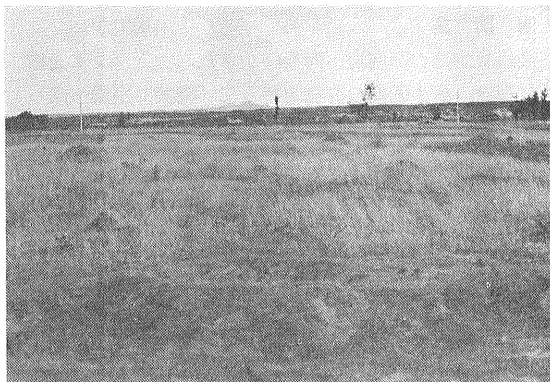
海南島の西端へ向う主要道路(海口付近) 並木は椰子の木

的地はおよそ220キロメートル西方に位置する海南鉄鉞(石碌鉄山)である。 出迎えの人の中に若い女性が1人居た。 北京に到着して以来これまで 将に紅一点の存在であった董麗清嬢も 幾分 氣持が楽になったようである。 暑い最中の故か 人通りは少ない。 南の島らしく 道の両側には たわゝに実をつけた椰子の葉が心地よさそうに風にそよいでいる。 椰子の並木は絶え高い広葉樹の森を抜けて バスはゴム園で停った。 海口からおよそ60キロメートル 先づ小休止である。 太陽の強烈な光も 深い緑に遮られて 小さな点にすぎない。 十分に温ったオレンジ・ジュースで喉を潤してゴム園に入ってみた。 所々に ラテックス(樹液)を採取するための小さな缶が 縛りつけてある。 しかし矢型に刻み込まれたゴムの木にも缶の中にも 生々しいラテックスは見られなかった。 恐らく このゴム園は既に 寿命が尽きかけているのかもしれない。 パラゴムの木の行先が思いやられる。

道はあくまでも平坦である。 打続く林の隙間から時



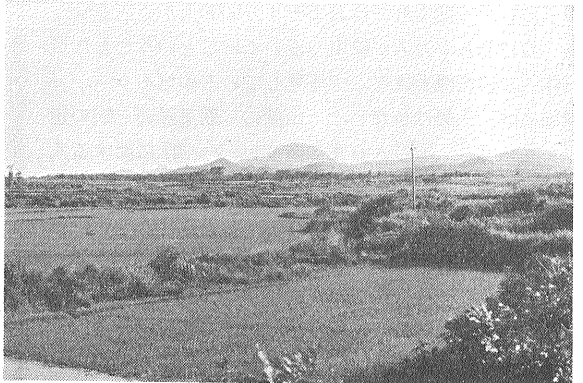
海口の西方60キロメートル付近のゴム園



海南島東部の風景  
オレンジ色のラテライトの大平原の遙か遠くによろやく山が見えた

折見える風景は 北緯18°9'から20°10'にわたって熱帯圏に含まれるこの島には山も丘さえもないのではないかとさえ思えるほど 平坦で単調である。 白く小さな天幕を張って バラス造りに精出しているらしい人が居る。 地面を掘下げて採石するのは容易ではなからう。 東川付近で見かけたのと同様に ここでも 採石はまだ機械化されていないらしい。 変化に乏しい風景の中を 150キロメートルばかり走り抜けた頃 かなり峻しそうな山が姿を見せた。 陽射しが急速に弱まり 夜のとばりが足早に迫ってきた。 熱帯とはいえ 窓から吹込む風もさすがに涼しくなっていくようである。 薄暮の中に 赤く焼けただれたような山肌と 所々に燈が灯った村が見えてきた。 目的地の石碌である。 ゆるやかな坂道を登って 宿舎に到着した。 海口空港を出発してからおよそ5時間も走り続けたというのに この宿舎の標高は90メートルに過ぎない。 海口を標高10メートルと仮定した場合その比高はわずかに80メートル これが218キロメートルも走って上った高さであり 海南島北部を東西方向に走るかぎり 坂道は殆んどないことになる。 宿舎到着は午後7時20分であった。 午後8時宿舎から200メートルばかり離れた鉄山職員宿舎の食堂で 夕食をとることになった。 海が近いので殆んど海産物の料理かと思ったが そうでもない。 雲南省の場合は草類をはじめ山の幸が多い故か 独特の料理があるが この食事のメニューはごく一般的な内容である。 40分ばかりで夕食は終わった。 そして 9時から 滞在中のスケジュールの打合せが始った。 10時ちょうど 一日の全ての行動は終わった。 宿舎の室温は 31.5°C である。

午前6時 室温は 29.5°C 比較的に爽やかである。 宿舎の前の道を職場へ急ぐ人はもう少ない。 宿舎から8キロメートルばかり離れた露天掘の現場は 年間に

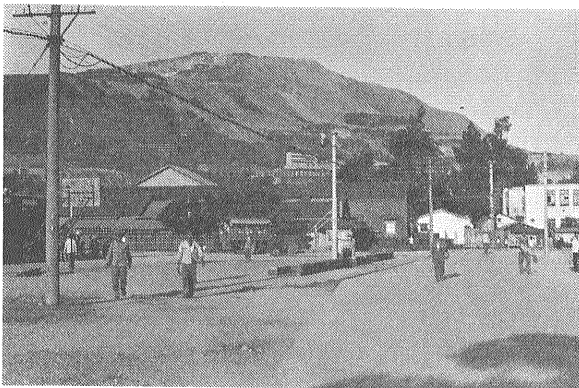


海南島西部の山岳と農耕地（海口から西方へ150キロメートル付近）

石碌の鉄鉱床はこの山岳の西方（右方）にある

鉄鉱石350万トン 銅鉱石6万トン 研944万トン 計1300万トンを掘出しているとは思えないほど ひっそりとしていた。 海南島最高の五指山（1879メートル）の北西方に位置する標高630メートルの石碌嶺に近接するこの鉄山付近は 標高561メートルを最高点として起伏に富む地形を呈している。 それを形成しているのは 主として 中下部カンブリア系の石碌層群に属する変成岩類であるが 総体的に見て これらの変成度は北へ向ってやゝ高くなっているらしい。 現場の北東方にはインドシナ期の細粒花崗岩があるということだが 遂に見る機会はなかった。 北西々々南東々々方向に走る褶曲と調和的に 鉄鉱床や花崗岩が伸長して分布しているということだが 地質構造と火成活動と鉄床の賦存状態などにみられるこのような特徴は興味深い。 ドロマイト中に総体的に上位から下位へ 鉄鉱床 コバルト鉄床 銅鉄床が層状又はレンズ状に胚胎している図面を見た。 コバルト鉄床の成因については 沈積変質熱液改造的硫化物型コバルト銅鉄床・火山沈積型鉄床・矽岩岩（スカルン）鉄床の3通りの考え方があり 鉄山では 現在 最初の成因を適用し 鉄鉄床や銅鉄床についても同様に考えている。 しかし 熱液は 既存の鉄床の性状を相当に改変する性質をもっているだろうか。 説明を聞いていた時 ふと 重複鉄化作用という言葉が浮んだ。

銅を目的とする調査の折 偶然に 鉄鉄床が発見されたということである。 かつては日本人の手によって開発され 1957年以降 この国が本格的開発に着手したこの鉄鉄床は 現在 この国第二の生産量を誇る大鉄山を創造する源となった。 露天掘のベンチを切って 黒々とした鉄鉄床が続き これからやゝ離れた所には スカルン鉄物を伴う高品位の銅鉄床が露出している。 この銅鉄床も やがて 本格的に採掘されるのであろう。



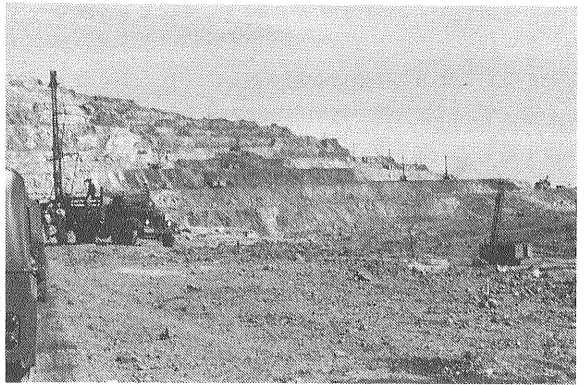
石碌鉄山の現場の遠望

右手の白い建物は鉄山事務所・革命委員会本部などである

眼下に広がる鉱山町ではおよそ4万5000人が生活を営み このうち1万人が鉱山で働いているということだが 一体 この労働者はどこで作業しているのだろうか。現場には 人影は少ない。山麓に 鉄道線路と駅の建家が見える。石碌から北部湾（トンキン湾）に面する八所港までおよそ52キロメートルを結ぶこの鉄道は この鉱山の鉄鉱石の運搬を主目的に 最初は日本人の手によって建設されたものである。その頃 今は懐かしい「義経号」が 鉄鉱石を満載した貨車を連ねて 走っていたということである。今は機関車も貨車も大型に変わり 一日2回客車も運行されて この地域の人々の生活と産業に重要な役割を果たしているわけだが 悪性マラリアが猖獗を極めた当時の鉄道建設の苦労は計り知れない。

この区間を含めて 総延長120キロメートル余の海南島の鉄道はすべて 日本人の手によって戦時中に建設されたようである。この島の開発には鉄道建設の推進が大きな役割を果たすように思えるのだが それが実現していないことから見れば この島の総合的開発は計画の段階を出ていないように思える。露天掘の現場 試錐岩芯選鉱場などを見 地質鉱床や採掘・選鉱などに関する意見を交換して 朝早くから時には夜遅くまで続いた海南島での仕事は終わった。試行錯誤しながら これから先鉄鉱の増産 銅鉱の採掘 コバルト鉱床の開発などが進められてゆくことだろうが 地質家にとっては 海南島の鉱物資源の実態が十分に把握されるに至っていないと思われるだけに 興味もたれる。

昼食後の一番暑い頃を見計らって カメラを手に 散歩に出てみた。無帽で半袖シャツでは やはり じりじりと照りつける太陽の光は強すぎるようだ。間もなく 汗がしたゝりはじめたが 拭うのも面倒である。路上の人影は少ない。グランドの横を通り 革命委員会の白い建物の角を右へ曲ってゆるやかな坂道を下りた左手に 小さな池があった。家鴨が群をなしてのんびりと水面を行く池の中程に架かる木橋を渡った所に 屋根の反った小さな東家がある。恐らくこの池は 人工的に造られたもので 町の人々の憩いの場の一つなのであろう。町の中心地も 今は ひっそりとしている。駄菓子屋らしい小さな店がある。現場から帰った直後 宿舎で アイスクリームらしいものを御馳走になったことを思い出して喉の乾きを覚え 「ニーハアオ ピンチリン・ウオヤオマイ」（今日はアイスクリームを買いたいんですが）と 声をかけてみたが 無情にも 「メイヨ（ありません）」という言葉が返ってきた。いさゝかがっかりしたが これまでは学ぼうともしなかった中国語が たとえ片言とはいいいながら 通じたのは収穫であっ



石碌鉄鉱床の露天掘 黒色部は鉄鉱床

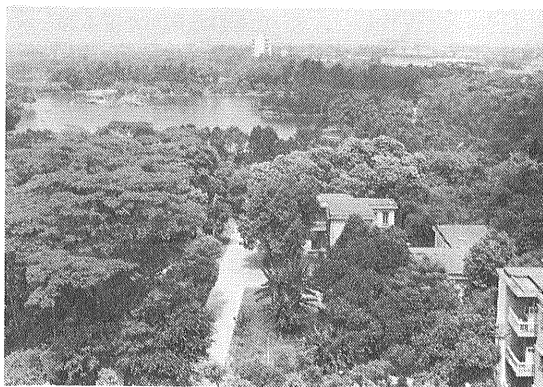
た。やがて 家並は絶えた。広くもない町だが 久しぶりに暑さの中を歩いたせいかわりに 汗を流すのは実に気持ちが良い。木陰に入ってフィルムを取換えていると 10人余りの人が集って来た。みんな笑顔で愛想が良い。目元の愛くるしい子供達は 人なつこく どの顔も利発そうである。二眼レフと蛇腹式のカメラが多い中国でも島の田舎だけに 特に レンズが簡単に交換できる一眼レフのカメラを見ることも殆んどないらしく みんなが物珍らしそうにのぞきこむうちに 人の輪は次第に小さくなっていった。一番小さな4〜5才の男の子にカメラを渡し 手真似で ファインダーをのぞかせ シャッターボタンを押すように教えたが その子供は はずかしそうに 後ずさりしながらカメラを手離した。その途端に みんなが一斉に 白い歯を見せて笑い出した。言葉の全く分らない異国の男を取り巻く人の輪は益々小さくなり やがて筆談の輪に変わった。恐らく子供達は 異国のいい年した男の字の下手さに 驚いたことだろう。学校では北京語で授業を受け 広東語を理解し 更に 海南島独自の言葉を自由に駆使しているに違いない子供達を見ていると 羨ましい気がする。

子供達と別れて 坂道をゆっくりと上った。絶え間なく吹き出る汗で シャツはべっとりとして背中中に張り付いている。全く御苦労なことだが この暑い最中の短かい散歩で得たものは大きい。

夕食後 昼間歩いた道を 再び歩いてみた。子供達と笑いこけた中心地には 涼を求めてか 通り難いほどに人が集っている。暑い盛りには 人気がなかったこの中心地は ネオンサインのない夜を迎えて 活気づくのであろうか。中心地の角にある中華書店に入って 教科書や技術関係の参考書や文芸小説など 書籍はいわゆる健全なものばかりである。海南島の地図を探して

みたが 小縮尺の世界地図以外には 見当らなかった。意外に涼しい夜風になぶられて この多勢の人達は 一体 何時頃までここに群れているのだろうか。毎朝5時半頃には出勤する人がかなり多いのを見ているせいがつい 早く帰宅した方がと 思いこんでしまう。1年に15回も台風の直撃を受け その被害も相当なものだといわれる海南島は 北部湾を隔て、ベトナム社会主義共和国と相対するという他のにも 何かを考えさせる島である。遠い昔 海南島は流刑の島であった。1036年に生れ 北宋時代の文学者として名声を得 又政治家として大臣の地位を得た蘇軾（号を東坡居士 あざなを子瞻という）が最後に流されたのもこの島である。湖北省黄州に流されて6年間を罪人として過した蘇軾は1085年 大赦された後大臣の地位についたが 1093年に再び罪人として 広東省惠州に流され 次いで海南島儋州に流される身となった。そして7年の後赦されて北へ帰る途中 江蘇省常州で病を得て 65年にわたる生涯を終えたのであるが 権勢に翻弄されたその波乱に満ちた人生は 将に 想像を絶するものがある。流刑の地海南島の土を踏んだ蘇軾が この島の光景を見つめて「天涯海角」と嘆息した心情を想う時 「人は春鴻に似てきたること信あり 事は春夢に似て了に痕なし」という蘇軾の詩が思い出される。しかし今 海南島は 鉄の宝庫として 農業地帯として 又 稀少価値の高いローズウッドをはじめとする林業地帯として 熱い視線を集めており かつての流刑の島は これから先は一層急速に変貌してゆくことだろう。人口およそ540万人の海南島には 鉄や銅やコバルトの他にも 未開発の鉱物資源があると聞くが これらを含めて この島の開発はどのように進められてゆくのだろうか。それが軌道にのるまでにはまだしばらくはかかりそうに思える。

はるばると訪ずれた南の島に別れる時がきた。午前



広州の流花公園  
東方賓館・交易会場のすぐ近くにある

5時起床 6時朝食 6時30分に石碌を出発する。出勤時刻を過ぎていたので 町には人影もまばらである。早朝の爽やかな空気は美味い。沿道の村は朝市で活気づいている。11時過ぎ 海口に着いた。道傍に立並ぶ椰子の木を見上げて 長い竹竿を上手に操っている男達が居る。その竿を一振りする毎に 大きな椰子の実が落ちてくる。のどかな光景である。露店の連なる通りを過ぎて バスは 芝生と椰子の緑の中にピロティ型の木造宿舎が建並ぶ一角に停った。この敷地に入る折にゲートがあったことから察すると こゝは特別の宿泊所なのかもしれない。全く静かな そして 緑の中に白い家が建並んでいる風景を見ていると まるで別荘でくつろいでいるような感じがする。広州へ出発するまでの間 この宿舎で憩うことになった。全体の素晴らしいはずまい 広々とした部屋と浴室 行届いたサービス 全く快適な宿舎である。

到着しておよそ30分の後 屋食の知らせがあった。同行の現地の人達は こゝでも 私達と同じテーブルを囲まなかった。同じテーブルを囲めば 結構楽しい話



広州の交易会場 この道路を隔てて東方賓館が建っている



広州駅



しもできることだし お互いに有益な何かを得ることができると思えるのだが この国では 招宴の時以外は同席しない習慣があるのだろうか。席に着いてすぐ 大皿に山盛りの蟹・車海老・蛙の足・野菜の油いため・春巻・白飯・饅頭・スープなどが運ばれてきた。一瞬皆の顔に 笑が浮んだ。そして予想通り 蟹と車海老だけは完全に姿を消した。

陽射しも弱まろうとする午後3時 海口市内にある工芸品工場を見学に出発した。「椰雕工藝廠」の表札があるその工場では 椰子殻を利用した工芸品が生産されている。多くの女工員の目の輝き 全く化粧されていない健康色の顔と作業服姿が印象的である。茶筒 人形 壁飾りなど 様々の物が作られているが 作っている所だからといって格安な値段とも思えない。生産物の流通機構や価格の決定はどのような仕組みになっているのだろうか。

夕食を終えて午後6時 海口空港に着く。そして雷雨のため 広州行は出ないかもしれないと聞かされた。石碌鉱山で 広州—海口間の飛行機はしばしば欠航すると聞いたが 旅の終りに近いこの日にその可能性があるとは 思いもよらなかった。私達は 滑走路の横で 出発の時を待ちつづけた。7時30分 広州からの飛行機が到着した。海口はもう暗闇に包まれようとしている。飛行機が到着してから出発するまでは僅か15分であった。離陸して間もなく機体が揺れはしたが それも長くは続かなかった。海口を出発して広州に到着するまで1時間20分 ジェット機はやはり速い。広州の気温は28℃ 石碌の夜よりも暑く感じるのは湿度が高いからだろう。東方賓館到着は9時 いささか空腹を覚えて 荷物を部屋に運んですぐに 喫茶室に足を向けた。久しぶりのサンドイッチとコーヒーの値段はおおよそ700円である。やはり外国風の食物や飲物は割高なのだろう。

一夜明けた午後3時 ホテルの部屋から廊下へ出たとたん 汗がにじんできた。エレベーターホールの一隅に常備されている氷水を一息に飲み干して 表へ出た。目的地は 部屋からすぐ近くに見えた流花公園である。気温は36℃ 暑い故か 人通りは少ない。東方賓館と広州交易会場となっている大きな建物との間の広い道路を横切って5分ばかり歩いた所に 公園の入口があった。入場料は約7円である。切符売場の小さな建物から公園へは一本道だが 切符売りの中年婦人は建物から出て 親切に 公園への道を教えてくれた。暑い盛りだからだろう この公園に足を向ける人は少ないようである。白く光る広い湖面を割って小舟が行く。湖

畔の並木はそよとも動かない。まるで一幅の絵を見ているような美しさである。突然 高い笑い声が聞えた。振り返ってみると 声の主は白いブラウスにスカート姿の5人の娘さん達であった。静かな水面に影を落とす美しい高樓と並木の深い緑 のんびりと棹さす小舟そして若々しい娘さん達のはずんだ声 静と動とが作る不思議なムードに浸って ほんの一時ではあるが 暑さを忘れた。宿舎を出てから小1時間が過ぎ 北京への出発時刻を気にしながら 足早に 宿舎へ戻った。

慌ただしく出発準備を整え 全員がロビーに集合した。ロビーの壁に貼ってある香港への船旅の広告を見て 誰かが このルートの方が便利で楽しそうだなと つぶやいた。確かに 珠江の濁流を下って青い海原へ出 複雑な海岸線と山並を賞でながらの香港への船旅は楽しいに違いない。しかし今は それは無理だ。どうやらロビーでざわめいている観光客も この船旅の客ではないらしい。空港の食堂は相変わらず繁盛しているが 北京行の旅客を送り出した後は この食堂も空港も休息に入るのかもしれない。夕闇が迫る6時40分 北京行のジェット機の扉は 満員の客を呑んで 閉された。幹線の故か旅馴れた感じの客が多い。北京までの飛行時間は1時間20分である。

この日の正午頃 北京の気温は広州よりも11℃ ぐらい低いと聞かされていたので 久しぶりに快適な夜を過せると予想したが 完全に当てがはずれて 空港はかなりむし暑かった。そして 旅の終りを北京飯店で過してみたいという願ひも 空室なしということで 絶たれた。中国で最高級といわれるこのホテルは どうか観光客で満室らしい。民族飯店 これが北京の宿である。



海南島 海口市内にある「椰雕工藝廠」の作業風景 質素な身なりに硬そうな木製の椅子 一心不乱に仕事する短髪的女子工員の顔に化粧の跡はみられない。